三省堂 漢和辞典

長澤規矩也 編著

第二版

三省堂 漢和辞典

第二版

長澤規矩也 編著

三省堂

© 1977 Sanseido Co., Ltd.

本書に使った略記号

親字の項

【　】当用漢字
〔　〕当用漢字外の漢字
〔　〕補正案で削る漢字
〔　〕補正案で加える漢字
㊀㊁ 別字が同一の字体をとった場合の区別
人 人名漢字
○ 説明の区切り
㊀ 音
①⑪ 音（意味によって異なるばあい）
㊀ 慣用音
㊁ 唐音（宋ッ音）
〔日〕国訓
（　）歴史かなづかい
〔　〕転化した許容の音訓

親字・熟語の項

＝ 同義語
≒ 類義語
× 対語
↓ の下現代表記

↓ の下参照せよ
↑ の上参照せよ
（文）文語
「　」用例
（　）ページ
〔　〕同一部首内の画数

熟語の項

【　】現代表記
〔　〕現代表記外
〔日〕わが国では…の略
▲ 親字が下にくる熟語

筆順の項

①～⑥ 学年配当
(1)～(6) 繰り上げた配当学年

専門用語

〔仏〕仏教用語
〔教〕教育用語
〔経〕経済用語
〔理〕理科学用語
〔医〕医学用語
〔植〕植物学用語
〔図〕図書学用語
〔運〕運動用語
〔哲〕哲学用語
〔法〕法律用語
〔数〕数学用語
〔化〕化学用語
〔動〕動物学用語
〔文〕文法用語
〔鉄〕鉄道用語
〔俗〕現代北京語

「第二版」序

同じ著者が、同一出版社から、同種類の辞書を出していることはおかしいという評が、利用者からも、小売店からも出ているが、これは編修にみずから苦心をしている私には解せないことである。ある大出版社の重役は、専門的な大辞典を作れば、小さな学習辞典は容易に作れるはずと言ったが、これも大変な間違いである。

辞書とは決してそういう性質のものではない。使いやすい、便利な辞書は、利用者にぜひとも必要な言葉を漏れなく収め、大して必要のない熟語を省く、つまり、「必要にして十分」を収録の主眼にしなければいけない。従って、漢和について言えば、専門家用辞典から抜粋した学習辞書は、熟語も説明も満足なものにはなり得ない。学習辞書には、専門辞書にない熟語を加え、専門辞書より易しい表現を使わなければいけない。同じ辞書内でも、難しい熟語と易しい熟語との説明文の表現には難易の別があるべく、漢字と仮名との使い分けも必要である。

こういう点から見ても、現代表記法が改訂されたからといって、私はすぐ全面的にそれに従うということはしない。ことに、従来の仮名書き部分が漢字で書けるようになったからというので、説明文の仮名を漢字に改めては、従来の表記法を覚えている利用者には使えなくなってしまう。

この辞書では、親字の音訓については、現代表記法で漢字書きが認められている部分はゴシック体―太文字―で表示し、熟語については、そのまま漢字で書ける言葉の上下には【 】、書けない言葉の上下には『 』の符号をつけた。この二点については、今回の第二版では、

全面的に更訂したが、説明文にあっては、漢字書きをふやすようなことはしなかった。「表(現)われる」の「わ」、「行なう」の「な」のような送り仮名は削った。不合理な「実る」「伴う」などは、仮名書きを採用した。

語学辞書内における、自然科学的、社会科学的用語の説明は、専門的には不十分であっても、理解し易いという点が先行する。又、人間がすることに完全は望めない。今回の改版に際しては、みずから気付いた誤りはもとより、利用者からのご注意は、再検討の上、改むべき部分を訂正させていただいた。ご教示に深謝するとともに、さらに皆様に甘えて、本辞書の誤りを少しでも減らしたいと思う。よろしくご援助をお願いする。

改訂の初稿は一昨年に成った。社の松村武久君のいつもの通りの助力によったところが大きい。ところが、たまたま発行所三省堂が、経営上の不合理から倒産し、かねてこれを憂えて、取るべき印税も遠慮していた私は、当然著者の債権者の筆頭となったし、三省堂現役著者中の古参でもあるので、会社再建に当たって、管財人の相談役の大任を引き受けることとなった。相談役となったからには、自己の著書を他に先行させて発行するわけにはいかないので、改版を遠慮していたが、今や管財人として世に名声を博している上野弁護士のご努力によって、再建計画が成ったので、逆旅にこもって、心行くばかり删補更正をしたのがこの第二版である。歴史ある三省堂の再建には、管財人を初め、社員一同とともに協力して、利用者の恩顧に報いたいと念願してやまない。

なお、今回の改版に際しては、特に、外池嘉子さんの尽力に感謝する。

昭和五十二年一月

長澤規矩也

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

本書の使い方（生徒諸君に）

――使う前に十分よく読んでください――

一　漢和辞典のむずかしさの解消

みなさん！

みなさんはどんなときに漢和辞典をお使いになりますか。意味がはっきりしない漢字漢語に出会ったときには、いつでも漢和辞典をお引きになりますか。そうではないでしょう。その漢字漢語の読みがわかっているときは、漢和辞典は引きにくいからというので、国語辞典をお使いになるのではありませんか。辞書というものは、使い慣れていないと利用できません。ですから、読めない漢字漢語に出会ったとき、急に、先生がたに教えられていた漢和辞典を本だなから取り出してみても、なかなか目的の漢字や漢語が引き出せないのです。そして、漢和は引きにくい、引きにくいと口ぐせに言っておいでしょう。たしかに漢和辞典は国語辞典より引きにくいものです。しかし、引きにくいから引かないと言って、利用しないでいると、いつまでたっても使いこなせないのです。わからないことを容易に人に尋ねることができる在学中はそれでもよいとして、ひとり立ちになって社会に出たら、どういうことになりましょう。

たしかに漢和辞典は引きにくいでしょう。しかし、使い慣れると、案外たやすく利用ができるようになります。この「本書の使い方」の内容をよくよく読んでみてください。もっとも、明治・大正のころにできた漢和辞典を使いこなすことは、漢文の専門家でも、今日の若い方にはむりのようです。まして、みなさんにはむりにきまっています。それはなぜでしょうか。

① 一字一字の漢字が辞書のどこにあるか、わからない。

② 熟語の上の一字が見つけ出せても、目的の熟語を見つけるのに時間がかかる。

③ やっと漢字漢語を見つけ出せても、説明の用語がはっきりつかめない。

このことは大正ごろの生徒――すなわちわたくしたち――も感じていました。そこで、当時から次のくふうがなされていました。

①(ア)全部の画数で引く総画索引をつけた。

(イ)音訓索引をつけた。

②(ア)第二字めの総画の順序に並べた。

(イ)第二字めの読みの五十音順に並べた。

しかし、③については方法がなかったようです。同じ辞書の中で説明が矛盾（むじゅん、このことばをこの漢和で引いてごらんなさい）していたり、わからないことばが使ってあるので、そのことばを同じ辞書の他のところで引き引きしているうちに、いわゆる堂々めぐりになったり、専門用語が専門家には正しくても、利用者にはむずかしくて、理解できないものがありました。

これは、一つの辞書を大ぜいの助手が分担して原稿を書き、その分担者が、たやすく分担部分をまとめ上げようと、他の辞書の説明を引いたり、みずからが内容がつかめない用語をそのまま写したからで、しかも責任をもって統一することがないからです。

ここで、戦前に考え出されたくふうを、今日の利用者の立場から考えなおしてみましょう。

みなさんは、読めない漢字や漢語は、国語辞典では調べられないから、漢和辞典をお使いになるのでしょう。ですから、音訓索

引がついていても、戦前の利用者と比べて、その利用度ははるかに低いものです。総画索引があっても、同一画数の漢字が多い画については、なかなか捜し出せますまい。熟語についても、音訓索引同様、第二字めの五十音順に並べては、今日の利用者には不便です。

みなさん！

物を買うときのことを考えてみましょう。物があまりたくさんあると、目移りがして、なかなかこれはというものが見つかりますまい。だれかが前もって選んでおいたものの中から選び出すとか、若い人むきの品物を専門に扱っているお店に行ってみると、選びやすいでしょう。

辞書だって同じことです。字数が多いとか、国語辞典で引けるような熟語まで漢和辞典にはいっているとかいうことは、みなさんにとっては選び出しにくい原因となります。

この辞書の内容は、みなさんむきの品物の専門店の品物のように限定しました。といっても、今はいらないというものを全部省略すると、まもなく不十分となってしまいます。そのことは、もちろん考えに入れて、いくらか余分に内容を選択しました。

品物――いや、漢字漢語をどのように並べたか、みなさんがたやすく捜し出せるように並べた、その並べ方を説明してみます。

まず、漢和辞典の内容構成について説明してみましょう。

今日の漢和辞典というものは、漢字の一字ずつについて、古来わが国で使っている読み方と漢字のもとからの意味とをしるし、その説明のあとには、その漢字――**親字**といいます――が頭についている二字以上のことば――**熟語**といいます――を並べて、その発音と意味とをしるしたものです。親字は、多くの漢字の中から、共通部分を取り出して、共通部分ごとにまとめてあります。この共通部分を**部首**というのです。

二　親字の配列の改良

漢字というものの多くは、左右か上下かに二分できます。左右に二分したとき、左半分を**偏**（ヘン、扁とも書く）といい、右半分を**旁**（つくり）とよび、上下に二分したとき、上半分を**冠**（かんむり）といい、下半分を**脚**（あし）とよびます。中には、左右にも、上下にも分けられないものがあります。部首の多くは、偏または冠として使われるものです。ところが、中には旁や脚に使われている部分の部首にはいっている漢字があります。また、分けようと思えば分けられるのに、全体を部首にしたものがあります。これは、この字のほかに、この字の全体を偏旁冠脚にした字があるからです。また偏旁冠脚の中から取り上げるのに、偏冠を取り出さずに、旁脚を取り出して、その部首に従属させたものがあります。それはなぜかというと、意味の上で、偏や冠よりも重点が旁脚にある漢字であるからというためです。これでは、みなさんが捜している意味がわからない漢字が捜し出せるはずがありません。

そのうえ、明治・大正の漢和辞典では、昔からのきまりどおりに、イ（ニンベン）が人部、リ（リットウ）が刀部、忄（ハンベン）が心部、扌（テヘン）が手部、犭（ケモノヘン）が犬部、旁にある阝（オオザト）が邑部、偏にある阝（コザト）が阜部にはいっていました。これらのイ・リ・忄などは、いくら部首表を捜してもありません。ただ、人・刀・心などの下に小さく付記されていたにすぎませんでした。しかも一方では、匚と匸、土と士、日と曰、月と月（肉部にはいっていました）が二つに分け

てありました。

わたくしは、若いころ、これらの引きにくい点を改めようと、

① 特別なものだけに例外を明示して、意味は全く考慮に入れないで、見たままの直感に従って、できるだけ偏や冠で引き出せるように改める。

② 多くの漢字の上半分または左半分に共通してある形で、従来の部首にないものは新しく部首を作る。

③ 亻・刂・忄・扌・氵・犭・阝（右）・阝（左）というような部首を作る。

④ 匚と匸、土と士、日と曰、月と月などの部首を一つに統合する。

ということを考え出し、漢和辞典に一大革新をいたしました。これが、昭和十二年に、本書の出版所である三省堂から発刊しました「新撰漢和辞典」で、みなさんの「おとうさま」や「おかあさま」が便利に使われた漢和辞典です。ですから、わたくしが漢和辞典を作り始めてから、もう四十年にもなるのです。いいかえれば、わたくしは、漢和辞典編修（集の字を書くことは辞書の編者としては賛成できません）の長い体験を持っています。しかも、引きにくい漢和辞典の構成を直そうと考え始めましたのは、それより二十年近くも前の中学生のときからで、戦前戦後を通じて、引きにくいと思われがちの漢和辞典を引きやすくしようと考えてばかりいましたし、今でも考え続けています。

ところが、戦後、また問題が出ました。というのは、字源を無視し、慣用を度外視した新字体というものが、漢字の知識を全く持たないローマ字論者と、これにただ追随することにのみ夢中であった漢文教育家によって造り出されたからです。漢字の専門家も漢和辞典編作の経験者もひとりも参加しないで造られたのが新字体です。とにかく、いろいろと批評されるのをきらって、明治・大正を通じて世間で使われていた字形を考えに入れずに、江戸時代の著作を根拠にしたといわれています。そこで、「新撰漢和辞典」の漢字の内容と配列とを、原則は元のままにして、一部分増したり改めたりしなければならなくなりました。ところが、戦後できた漢和辞典では、字形がすっかり変わってしまったのに旧字の部首のままに新字体を従属させました。たとえば、両（旧字体は兩）が入部に、単（單）が口部に、円（圓）が口部に、会（會）が日部に、尽（盡）が皿部に、旧（舊）が臼部に、万（萬）が艸部に、売（賣）が貝部に……というようなものです。そこで、わたくしは、わたくしの原則に従って、両を一部に、単を冂部に、円を冂部に、会を人部に、尽を尸部に、旧を丨部に、万を一部に、売を土・士（上）部に収めることを考えました。

つまり、

⑤ 新字体の各字は、①および②の原則に従って並べ、そのために新しい部首をさらに作る。

ということをして、新時代の若い方々にとって、最も引きやすい漢和辞典にしました。これが「明解漢和辞典」です。

漢和辞典の引きにくい理由のもう一つは、漢字の画数がよくわからないということです。これは、戦後の若い方にとっては、いっそうの難事です。というのは、戦後の教科書には、小学校用に使われる筆写体（教科書体）と、中高用に使われる活字体（明朝体）と二種あって、両者の字形に差があるのみならず、活字の字形には、形を整えるために、筆をとめる部分を強く表し、一画多いように見えることがあるからです。たとえば、「比較」の「比」

の字は四画に数えるのですが、活字の「比」の字の偏は明らかに五画で、わたくしの「長」の字も、八画ですのに九画にも見えます。「之」は、部の三画ですが、二画に数える人が多いでしょう。そこで、いっそのこと、曲がったら別に一画に数えても引き出せるようにくふうしました。もっとも、これはわたくしの創意ではなく、書道の大家藤原楚水（喜一）先生が三省堂の顧問であったときに示された、ご意見に従ったのです。

⑥ 画数がはっきりしないものは、どう数えても引き出せるように重出する。

⑦ 筆法で、曲がったら一画に数えても引き出せるように重出する。ただし、はねる場合（事の縦棒など）・湾曲の場合（心の第二画）・運筆の初め（旧字の又の末画）などは、一画として加えない。

このように本文に親字を並べると、従来の辞書にあるような引きにくい「総画索引」はいりませんが、利用者のご要望を入れ、筆法別の新式の総画索引を加えて、筆順の第一画の筆の運び方から検索できるようにしました。また、「音訓索引」は、音か訓（漢字にあてられたわが国での一定の読みの単語）のどれかを知っているときに、その音または訓から引くものですから、整理した上で巻末に載せておきました。

同一部首の同一の画数内の漢字の配列の順序については、いろいろ考え続けていますが、まだこれなら文句がないというものが見つかりません。筆順法も考えてみましたが、とにかく、昔の清国の字書の順を、無意味に受け継ぐよりはまだましだと、戦前の辞書で改良されました、音の五十音順にしました。漢字の音というものは、多くは、估コ・柏ハク・鯉リのように、部首にならないほうの半分の音と同じですから、みなさんが音を知っていなくても、いちおう見当がつきます。

⑧ 同一部首同一画数内の親字の配列は慣用の字音の五十音順による。

三　親字の引き方

では、みなさんとごいっしょに、調べたい漢字を、この辞書ではどのようにして引き出すか、考えてみましょう。つまり、**親字の見つけ方調べ方**の練習です。

まず、漢字を左右か、上下かに分けられるかどうか、考えてみます。分けられたら、左半分（偏）か、上半分（冠）かが部首にあるかどうか捜してみます。

例一　相　左右に分けると木と目とになります。そこで「木」が四画ですから、部首索引（表紙の裏）の四画の中で「木」を捜します。ありました。そして、「木（左）部」が四二七ページから始まっていることを知り、それから、「目」が五画ですから、次にわくの外――「柱」とよびます――で、**【木（左）】**の5を見つけます。5の下の片かなが字音ですから「相続」ということばの「相」の慣用音「ソウ」を見つけ、四三〇ページ第三段に捜しあてました。本文の【相】字の上の「5」という数字が木部の五画であることを示します（なお、画数の変わりめはわかりやすいように太字の数字にしてあります）。そのすぐ下の、小学校の教科書でみなさんが見慣れた字体が筆写体です。その下の「もと目4」というのは、普通の漢和辞典では目部四画にあることを示します。なぜ古くからの辞書で目部に入れてあったかというと、「みる」つまり、木に

登ってみるとよく見えるということからできた漢字であるからです。これでは、「みる」という意味を知っていないと、捜し出せないではありませんか。この辞典は、そこで、目で見たままの直感によってわかる「木部」で引けるように直しました。

例二　季　二度めですから、少し簡単にしましょう。上下に二分すると禾と子とになります。部首索引の五画の中で、「禾部」の初めが四九八ページにあることがわかり、三画の「季」は五〇〇ページの第三段に出ていました。「もと子5」とあるのは、この字のもともとの意味が「すえっ子」であるからです。そうだからといって、みなさんに、「季」の字を「子」部の中に見いだしなさいといってもむりでしょう。ですから、わたくしは、五十年も前から「禾」部に入れるのが当然だと考えていて、三十数年前に、はじめて漢和辞典を作ったときに、この理想を実行に移したのです。

例三　賀　この字は上下に二分すると加と貝とになります。部首索引の五画には「加」がありません。こういうときには、もう一度部首索引で下の半分の「貝」を引きましょう。ありました。しかも、「(左・上)」と「(下)」と二つありました。この辞書では、前の「木」も上・下・左・その他に分けましたが、口・土なども、同一画数に属する文字が多いので、引き出しやすいように、その中を分けたのです。そこで、この「賀」の字がその五画（五八〇ページ）に見つかりました。「貴」の字にしても、上半分は部首にはありませんから、やはり、この「賀」の次にあります。このように、偏や冠でなく、旁や脚で引くものは、部首索引の部首字形の下に例外部首として＊じるしをつけておきました。欠・頁・魚・鳥などがそれであります。

例四　嗣　左右に二分することはできますが、どちらの半分も部首にありません。こういうときには、左半分のさらに上半分の口（その他）で引いてみて、口部十画に見つけます。

例五　啓　上下に二分することはできますが、上半分は部首にありません。下半分の「口」の部首には（その他）はありますが、＊じるしがありません。ですから、上半分のさらに左の戸の七画で引きます。

例六　米　これは左右にも上下にも二分できません。ですから、全部を六画の部首で引きます。

前に説明しました、曲がったら一画に数えると、「相」は木部六画で、四三三ページ上段に、「賀」は貝（下）部七画で、五八一ページ第四段に、「嗣」は口部（その他）十三画で、一九一ページ第四段に、「啓」は戸部八画で、三八八ページ第二段にも出し、そこに、たとえば「【相】→5」とあるのは、同じ木部の五画を見てくださいという符号です。もとの部首で引く人のためには、目部四画の五十音順のところに「【相】→木5(480)」とあげて、木部五画、ページでいうと四三〇ページに説明が出ていることを示し、ページ数の下に「ル」と小さく付記して、旧来の辞書ではここにあったことを表します。→の符号は、所属部首を変更した場合ばかりでなく、みなさんが引いてみそうな場所にはどこにも出しました。たとえば、楽器の「びわ」の漢字である「琵琶」の「琵」ですが、下半分の「比」部八画にも→王8(471)と、小さい活字ながら、出しておきました。

このついでに、ちょっと分類のしかたについて説明してみまし

よう。分類はものごとを整理するときにします。この場合、一家の系図のように初めは大きく分け、だんだん細かく分けるやり方と、デパートの売り場のように初めからかなり細かく分ける方法とあります。わたくしの辞典の漢字の分け方はデパート式に近いでしょう。これに対して、初めから細かく分けすぎるという批評をされた方があります。その例に、中華民国で行われる四角号碼（パーオアーチオ）をおあげになりますが、これは少しみなさんには専門的すぎましょうが、漢字の運筆法を十大別して、運筆法によってすべての漢字を0から9までの四けたに数字化するのです。この方法は、創案者が当時の最大出版業者のオールマネィジャーでしたから、かなり広く使われましたけれど、偏旁冠脚を知らない西洋人にはこの上なく便利であるとはいえ、われわれには、偏旁冠脚による分け方のほうが引きやすいのです。わたくしどもには、マンションの住人を捜すよりも、いく棟かの長屋の住人のほうが楽に訪ねあてることができます。

四　字形の説明

漢字の字形にはいろいろあります。まず、当用漢字字体表（これは字体表というよりも字形表と称すべきです）にある字で、当用漢字として使う字形が戦前使われていた活字の字形と一致しない字形が新字体とよばれていますが、これに対して戦前の活字の字形を旧字体といいます。ところで、字体表に出ている字形はすべて活字体で、書くときは少し違って書いてよいことになっており、その字形が小学校の教科書に使われ、したがって教科書体ともよばれています。

本辞典では、親字はすべて活字体を出しています。しかし、みなさんは、小学校で教科書体を見慣れておいでですから、教育漢字八八一字と今後六年生で教えられるはずの備考漢字一一五字とに限ってこれを親字の下にあげ、見慣れていない、当用漢字外の各字については略しました。親字の上下の囲みが【　】のように黒く出ている漢字が当用漢字、〖　〗のように白ぬきで出ている漢字が当用漢字外の漢字です。まれに【　】とか、〖　〗とかいう囲みの漢字がありますが、これは当用漢字補正案で削る字と補う字とを示します。もともと「当用漢字」とは、「当用日記」というものが戦前ありました、その「当用」で、用うべき意味ではなく、さしあたってその当座用いる意味ですから、二十年近く使われている今日までに当然訂補されてよいものですが、一度公表されますと、是非の批判がやかましく、なかなか改められません。それで、やがて改められるものと考え、わたくしの旧著では、補正案によって、よく新聞雑誌で使われている「灯」を見出しの親字にしましたが、教科書や公文書では、いまだに「燈」を使っていますから、本辞典では「燈」に直しました。

当用漢字外の漢字につきましては、世間で広く使われている字形をあげ、当用漢字とも正字・俗字・略字・本字・古字・誤字などを別に親字としてあげて↓で説明がしてある字とその場所とがわかるようにしてあります。**俗字**とは正しい字ではないが、俗に世間で使われている字、**略字**とは画数が少ない、古今の俗用字、**本字**はもともとの字形という意味で、古字に近く、**古字**とは、古代に使われていたと伝えられる字形です。

ただ、**正字**というものについては少し説明がいります。本来は戦前から学界で正しい字形と認められている字形で、本辞典でもその意味に使います。ところが、当用漢字が制定されましてから

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

は、当用漢字字体表に出ている字形を正字だと思い込んでいる人が出ましたが、これは誤りです。印刷所にしても、当用漢字の文章ばかり組んでいるところでは、新字体を正字といっているところがかなりありますが、当用漢字以外の漢字の活字がたくさんある印刷所では、はっきりと、新字・旧字以外に、この辞典に「正字」とあげているような字形を正字と正しく区別しています。

「恥」（五四七ページ第二段）の説明に「俗用略字」とあります。これは、労働組合員などがかってに使っている字形であることを示します。

「杯」（四二九ページ第二段）の説明の最初に「1盃」とありますのは、今は「盃」の字を「杯」としるすという意味です。この逆の「盃」（四〇ページ第二段）には「1杯」と明示しておきました。

五　親字の音

親字の下にしるされている、説明の部分についてお話しいたしましょう。わかりやすいように、「親字の引き方」のところで例にあげました「相」の字について説明してみます。

みなさん、この辞典の四三〇ページの第三段を見てください。親字の下に出ている筆写体（教科書体）はわかりますね。その下の「もと目4」も。

その下に㊐とあって、「**シ**■(ャ)**ウ・ソ**(サ)**ウ**」とありますね。「相」という漢字の字音です。太いかな文字（ゴシックに似た正しくはアンチック）でしるされているのは当用漢字音訓表にあり、現代表記法で、その字音の使用が認められているものです。（　）の中は、戦前のかなづかい（旧かな・歴史的かなづかい）では「シャウ・サウ」と書いていたことを示しています。この字音のところの片かなが、普通の細い字（明朝体）で記入されていれば、音訓表にない字音です。ところで、字音の記載法の別の例をあげてみましょう。

その一は「是」（四〇二ページ第二段）の場合です。まず㊅の記号があり、その下に「**ゼ**」とあり、次に㊐の下に「シ」とあります。この㊅は**慣用音**を示し、つまり、正しい字音は「シ」ですが、わが国で習慣的に「ゼ」と発音され、その「ゼ」が太文字ですから、音訓表で認められていることを表示します。

その二は「楽」（四二六ページ上段）で、㊐がなくて、「①**ガク**」とあり、その先に「⑪**ラク**」とあり、さらに先に「⑩ゴ（ガ）ウ」とあります。これは字音によって字義字訓が違う場合の表示法です。この場合⑪の上が「ガク」と読む場合の訓義、⑩の上が「ラク」と読む場合の訓義で、⑩の下が「ゴ（ガ）ウ」と読む場合の訓義であることを示します。

その三は「行」（二九二ページ第二段）の親字の下の「⑪㊐**アン**」です。これはあまり多くない唐音（宋代の音の転）です。

その四は「芸」（二七一ページ第二段）の場合です。白ぬきで、Ⓐ とⒷとにまず分けてあります。これは「藝」の新字体が昔からあった「芸」と同じ形になったもので、Ⓐの音義とⒷの音義とはもともと全く別であったことを示します。近ごろ労働組合などでは「闘」の字の画数が多いので、全く別の字で簡単な「斗」の字を誤って代用しています。そこで、そういう誤用の例までもこの辞典では収載していますから、「斗」（三九四ページ上段）には、同じ「トウ」という発音でも、ⒶⒷに分けて説明しました。同音ですが、「斗」は普通「ト」と発音しますので、「トウ」という字音の上に慣用音の「ト」をあげました。

木や草や虫や鳥の名などには、漢字の造字法に習って、わが国で作られた漢字のような字があります。これは昔から**国字**とよばれていました。「働」以外のこれらの文字には音がないわけです。そこで、たとえば四三一ページの下段の左方を見てください。字音が出ていないで、最初に「国字」とあります。

「桂」(四三二ページ第二段)とか、「橘」(四三九ページ第三段)とかには、字音の上に「人」という一字があります。これは当用漢字表にない漢字ですが、音訓表ができたあとで、識者に当局がつっこまれて、人名には加えて使ってよいという字で、人名漢字表に入れられた漢字であることを意味します。この人名漢字と当用漢字を人名に使う場合はどういう読みでも、役所が出生届けのとき受け付けなければいけないことにきめられています。ですから、あなたがたの名まえの中には、学校の先生もちょいと読めない、むずかしい読み方がありましょう。当用漢字で読みの制限をしており、その原則から考えるとおかしいではありませんか。本辞典には付録に、人名に用いてよい漢字の読み方を一覧表にして、弟さん、妹さんの名まえをつけるときの参考にしました。ご両親にこの部分を見せてあげなさい。きっと喜ばれますよ。

六　親字の訓

われわれが普通使う訓とは、昔からわが国で漢字にあてて来た、漢字の一字一字について一定している日本語の単語です。本来は、漢字本来の意味(義)と一致すべきでありますが、一致しない用法もあります。

親字の下の説明のうち、字音の下に、㊀㊁㊂と列記してあるのが訓義で、意味が違うごとに分類してあります。その順序はだいたい使用度の多いものからあげてあります。訓義が一つだけの場合にも、それが訓義であることを示すために㊀を加えました。㊁以下が欠けているのではありません。

また、みなさんがわかりやすいように、まず「相」字(四三〇ページ第三段)について、具体的に説明しましょう。

まず「㊀**アイ**(ヒ)」です。片かなの部分が訓の中で漢字に置きかえられることをさします。つまり「アイ」と読ませるために「相」字を使うときは、「アイ」の代わりに「相」と置き替えればよいということです。「㊂みる」という場合には、「相」という漢字を「ミ」というかなの代わりに置き替え、「る」を添えることを示します。この添えるかなを**送りがな**とよびます。

なお、この場合でも、「アイ」は当用漢字音訓表にあるから太字で、「みる」は音訓表にないから、細いなみ字で表示しました。音訓表では、普通、音を片かな、訓を平がなで書くことになっていますが、漢字に置き替えられる部分を明記するため、便法として本辞典では、このように、訓を片かなで表しました。字の横に線を引くという方法もありますけれど、印刷技術上はっきりしないこともありますので、この表記法を採りました。みなさん、まちがえないでください。

(ヒ)はもちろん旧かなです。その下に、㋑㋺と分けてあるのは、「アイ」と読むときの違った意味を示します。㋺の項には、〔日〕と入れてあります。㋑の場合も同じです。これは、漢文ではそういう意味では使われず、わが国でのみ使うものであることを示します。しかし、漢文に用例がないと断言しえない場合もありますので、この区別はだいたいと思ってください。

「㊁大臣」には片かながありませんね。これは、相を大臣の意

味に使う場合には訓がないからです。「大臣」のわが古いやまとことばは「おとど」でしょうが、「相」一字を「おとど」と読んだ例は普通にはありません。「―成る」「武―」は「相」字を使った用例です。「―」のところに「相」字がはいります。

別の例が、「相」以外のところにありますから、その説明もいたしましょう。

「雨」（六一三ページ第三段）の訓に「**アメ**〔**アマ・サメ**〕」とあります。これは、音訓表には「ウ」という音と「アメ」という訓としか出ていませんが、「雨水（あまみず）・雨具（あまぐ）・小雨（こさめ）」というような転用が認められていることを表します。

七　筆順の見方

もう一度「相」（四三〇ページ第三段）を見てください。親字の説明のあとに、行を改めて、〔筆順〕とありますね。この筆順というものについても、「現代表記と本辞典」の「三」の中で説明してありますが、整った、きれいな文字が書ける、運筆の順序です。本辞典では、利用者の要望によって、教育漢字八八一字、および新しく六年生が使うことになった備考漢字一一五字についてだけ示しました。一行に収録するため、わかりやすい順序は一つにまとめましたが、④とあるのは四年生のときにはじめて学ぶ漢字であることを示します。学年配当（何年生が習うか）です。(1)―(5)は一学年後の学年配当を示しますが、これは、この学年で指導したほうがよいという、専門の教育家が指示した結果で、(6)は六年生で、この程度の漢字は教える必要があると指示された分です。

八　熟語の構成

熟語とは、二字以上を結びつけて、新しい意味を表したものをいいます。ただし、この中には、結びつけられた各字の意味を合わせると意味がわかるものがあります。

熟語はすべて第一字の親字のところにまとめました。これは新しい方法ではありません。その配列は第二字の総画数の少ないものから多いものへと並べ、同一画数内の順は、慣用の字音の五十音順によりました。

前にも説明しましたが、あまりたくさんの中から目的のものを捜し出すことはむずかしいものです。そこで、この辞典では、みなさんが卒業されて広い実社会に出ても必要があるまいと思われるようなむずかしい熟語はもちろん除きましたが、一方では、みなさんが国語辞典を利用されるような、読みやすい熟語で、しかも各字の意味を知っていれば、それを合わせて考えると容易に意味がわかりそうな熟語は、親字の説明中に、用例としてあげ、熟語の中からは省きました。しかし、現代表記法では漢字の使用を認めていないあて字を多く入れ、その初めに（あて字）という表記法を使いました。

漢文の中で使われる漢語と、わが国で造られて、漢文の中では使われない準漢語との別は、親字の用法よりはるかにむずかしいものです。だいたい、本辞典にはわが国で使われる熟語を主として収録しているので、漢文を読むことがない、本辞典の利用者にはこの区別は必要ではないと信じてやめました。まれに〔日〕という例が出ていますが、それは、「わが国では……」と書き加えると一行ふえるような場合の省略のためです。

熟語の上下に【　】があるものは、現代表記法でそのまま漢字だけで書けるもの、書かないことになっているものは、『　』の中に入れました。この際、補正案による漢字の区別はしません。また上下二字のおのおのについて、漢字で書けるかどうかを区別することは、三字以上の熟語もありますのでやめました。二種以上の読みがその下に出ているものは、この区別は最初の読み方に従いました。

同じ漢字を第一字として、第二字が違う熟語で、意味が全く同じものは、ページ数を少なくしたいため、別に出さないで、‖を冠して一括しました。たとえば、「相」(四三〇ページ)の熟語の「相愛」の下に「‖相思」とあげたようなものです。

第一字以外に新字体以外の字形や当用漢字外の漢字が使われている熟語は、見出しの熟語の漢字の字形は当用漢字字体表中の漢字にして、その下に旧表記をあげました。「相」の場合の「相伝」「相当」の下の「1相傳」「1相應」、「決起」(三二五ページ)の下の「1蹶起」のようなものです。この逆に、「相剋」の下の「1相克」は、「剋」が当用漢字外であるため、今日では「相克」と書くということを表しています。

語義が二つ以上ある場合は㊀㊁㊂…と数字で分け、さらに細かく分ける必要があるものは、㋑㋺㋩…で区別しましたが、そのおのおのの順序は、だいたい使用度の高いものを前に置きました。

意味によって読みが違うものは、読みがなに、説明の中の㊀㊁…を冠して、呼応させました。この場合、一方の読みがなに㊀㊁などがないものは、その読みは、㊀㊁…の全部について、通じてあてはまることを意味します。

説明の文章中、同一表現をくり返すことによって行がふえるものについては、∧や∨を使って、簡単にしました。たとえば「相対」の説明の中の「互いに∧あい対する∧関係がある∨こと」とあるのは「互いにあい対すること」と「互いに関係があること」とをまとめて簡単にしたものです。

句読点については、文章がきれるときに句点の「。」、文章の途中は読点の「、」とみなさんは学校でお習いでしょう。そのとおりで正しいのです。しかし、辞書の説明文は、同じような意味をいくとおりも並べることが多いのです。それから終止形で結ぶかなを略すことが往々あります。そこで、一つのつながった説明の途中で、正しく句読点を使うと、どこまでで一つのまとまった説明になるのか、はっきりしないことがあります。そのため、まとまったところのあとを「。」で示すことにしました。この例は熟語の説明中に多いのですが、親字の説明中にもあります。気をつけてください。

引用文の中で、見出しの熟語と同じ部分は、二字の場合は「—」、三字以上の場合は「——」で示してあります。

九　熟語の調べ方

1　熟語の第一字の親字のところで引き出す。同一親字の中では、第二字の総画数を調べて、該当部分を捜す。同一画数のものは、慣用字音の五十音順に並べてあるから、そのつもりで捜す。

2　目的の熟語が、熟語の見出しの中を1の方法で捜して見つからないときは、見出しの下に出ている「‖」「1」「↓」の下の同義語や違った字形の中にないか調べる。

3　以上のところにない熟語は、親字の説明の中の用例中を捜

し、あったら、その項目の訓義と、他の字の訓義とで解く。

4　それにもないときは、各漢字を別々に親字として引き、組み合わせて意味をとる。

5　当用漢字で、親字を下に使った熟語にどんなものがあるかということは、熟語の見出しのあとの▲字の下に並べてあるからわかる。

十　最後に

この辞典の原稿は、既刊の「明解漢和辞典」と「三省堂漢和中辞典」とをわたくしの助手の志岐ちづに命じて比較して、たがいの有無詳略部分に赤線を引いておいてもらったものと、わたくしの年来作っておいたカードとをもとに、わたくしがひとりでまとめました。もっとも、まとめている途中で、数人の助手に内容や表現について意見を求めました。

校正ももちろん助手たちに手伝ってもらいましたが、なにぶん、数年にわたってまとめましたものですから、不十分・不統一のところがかなり多く出ました。それらについては、校正中、三省堂の松村武久君が、献身的に貴重な意見を出してくれました。この点では、おそらく協力者にも匹敵しましょう。感謝します。

わたくし名の漢和辞典では、今まで、わたくしの基本的な資料によらないで、他の方にはじめから書いていただいたというものはありません。「三省堂漢和中辞典」でも、わたくしの「新撰漢和辞典」と「明解漢和辞典」とを骨子としてまとめてもらった原稿にわたくしが手を加えたもので、「携帯漢和中辞典」になおしましたときは、わたくしが自分で手を下しました。

大ぜいの手で作ると統一がとれませんが、ひとりでまとめましても、長い年月の間には、途中でほかの仕事もしますので、統一を失う部分もできたり、思い違いや、書き誤りが出たりするものです。

利用者のみなさま、お気づきの点は直接わたくしまで（神奈川県茅ケ崎市菱沼一五九二）ご遠慮なくお教えくださいますよう、お願いいたします。訂正して、その後の利用者に少しでもご迷惑にならないよう心がけたいと思いますから。

昭和四十六年桃の節句

長澤規矩也

現代表記と本辞典

――特に先生・父兄の方々に――

一　辞典・字典・事典

辞典・字典・事典の三者は、世上で混用されることもあるが、厳密には、上の漢字の字義が違うように、元来は異なるものである。すなわち、ことば・文字・事項を説明するものである。

そこで、国語辞典・英和辞典・独和辞典というものはあって当然であるが、この種の語学辞典には、某々字典というものはありえない。すべてが、一字一字の意味を説いたものではなく、ことばを説明したものである。このことは、表音文字とよばれて、一字ごとに、字形と発音とを有するが、一字ずつのすべてには意味を必ずしも持っていない、ローマ字やかな文字をならべたことばを説明するものについては、当然である。

これに反して、漢字は、表意文字とよばれて、一字ずつに、字形・発音のほかに、意義を持つものであるから、各字の説明に重要性がある。ゆえに、漢字典というものが別にありうる。であるから、漢字典では、各字について、字形・字音・字義の三者が説明されなければならない。

漢字の字形は、もともと事物の形状、または意味を表したもの、すでにあった二つ以上の漢字を意味の上から組み合わせて新しく造ったもの、漢字ができる前からあったことばの発音を表す既成の漢字に、そのことばの意味を示す字形を組み合わせて造ったものなどに分かれる。その字形がどうして造られたかが字源である。

字音は古今南北で差がある。隋唐の字音は今日知ることができない。しかし、有史以来、漢字の字音は単音節であったといわれる。単音節のことばで天地間の事物いっさいを区別表現することはむずかしい。そのために、漢字の発明以前から、発声の初めと終わりとの間に強弱抑揚の区別をつけて、事物を区別する習慣があった。この発音の区別のおもなものに四種あるので、これを四声とよぶ。地方によっては、四種以上あることもある。詩の韻は四声がさらに細分されたものである。しかし、四声の区別だけでは、事物の区別は不十分である。

四声も、古今南北一様ではないが、漢字の意味の、古今南北の差はいっそうはなはだしい。字源によって説明できる漢字の意味は原義であり、それから派生した転義は、原義の何倍かある。中には字義によって四声を異にするものもある。それはともかくとして、同音の発生法を四声によって分けただけでは、事物の区別はできないために、二つ以上の漢字を組み合わせて新しい意義を持たせるという方法が案出された。こうして、熟語ができたのである。熟語の解釈ということになると語義となり、字義ではなくなる。そこで、漢語辞典というものが成立することになる。

二　漢和辞典の特殊性

今日、わが国で行われている漢和辞典の大部分は、漢和字典の要素である、漢字の一字ずつの発音と意味とを説明しているほか、熟語の読解をも収めている。厳密にいえば、字典と辞典と、二つの性格を兼備しているというわけであるが、内容量からいえば、辞典的要素である、熟語の解釈のほうが、字典的要素よりも多い。それのみか、漢和辞典の場合、一字ずつについても、訓と

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.